

## 村岡典嗣の臨終－梅沢文書の二点の資料から－

曾根原 理

## はじめに

日本思想史学の確立者として知られる村岡典嗣（1884-1946）の学問については、すでに多くの著書や研究が公刊され、多方面から論じられている。近年は、公刊された資料にとどまらず、一次資料の発掘と調査についても着手され、研究の新たな段階へと進むことが期待される状況である<sup>1</sup>。それに関して、東北大学史料館には、村岡の死後東北大学に残された資料を集めた「村岡典嗣文書」358点が残存している（2012年10月公開）。内容は講義ノート類や原稿類（論文、講演など）、資料メモ・資料抄録類が中心であり、多くの一次資料を含んでいる。

基本文献というべき上記村岡文書に加え、晩年の村岡が最も信頼した門弟の梅沢伊勢三（1910-1989）旧蔵文書128点が、今回公開された。そこにも、村岡の活動を明らかにする資料がいくつも含まれている。本稿はその中でも、村岡の臨終に関する資料を紹介し、内容を検討するものである。

一般に学者について調査する場合、学問的な業績については当初から本人自身が意識して公開するため、一概には言えないものの、確認は比較的容易である。それに対し、私的側面（家族関係など）については、まとまった記録が残ることは珍しい。遺族からの聞き取りが可能であれば、また本人や家族などの関係する文章があれば、さほど苦勞せずに調査が進められる。しかし必ずしも期待できない場合、著作や関係者などの刊行物から序文・跋文など見られる断片的痕跡を積み上げていく作業が必要となる。村岡の場合は、幸いにして池上隆史氏による精力的な調査成果が提供されている<sup>2</sup>。しかし、臨終に関する記録としては、次の梅沢氏の「後記」が最も詳細とされている<sup>3</sup>。

昭和二十年十一月、村岡先生は『平田篤胤』の原稿完成のため、約一ヶ月を秋田県下六郷村の農家に過された。仙台に戻られて後、消化不良の気味で、健康がすぐれなかったが、鋭意努力を続けられて年末にその原稿を完成し、戦後はじめての新春昭和二十一年を迎えられた。しかし年初から風邪気味の不快が続き、一月下旬遂に病臥されるようになった。それでも、平素殆ど病気知らずで過された先生は、御自身さほど重大にも考えられなかったとみえ、一見なかなか元気で来訪者にも会われ、よく将来の計画などについて語っておられた。戦時中から続いた長い栄養障害の為か、病状は一進一退であり、そのまま二月も過ぎ、三月二十一日に東京文理科大学、同三十一日に東北大学を、それぞれ停年をもって、病臥のうちに退官された。

四月はじめ、当時の高橋里美法文学部長が病床を見舞われ、熊谷岱蔵博士に診察を受けられることを切にすすめ、即日博士の来診を受けられたところ、結果は意外に重大で、四月八日急遽抗酸菌病研究所附属病院に入院されることとなった。入院後一時小康を得たが、心臓の衰弱が甚しく、十三日午前九時、きか夫人看とりのうちに「静かに歌でも考えよう」の一語を最後として永眠された。病室の壁には先生の御希望によってその前日に掛けられた竹田の観音像があった。

親戚・知友・門弟などの悲歎哀惜のうちに、四月十七日仙台市石名坂の円福寺で葬儀が行われたが、終戦後間もない混乱の中にもかかわらず、各界から多数の人々が会葬し、悲しみの中にも盛大な告別式であった。(以下略)

ところで、今回「梅沢文書」の整理を行ったところ、村岡の臨終に関する資料が二点発見された。いずれも未公開であり、従来知られていない事実も散見されるため、この機会に紹介することとしたい。

## 1. 梅沢メモ「村岡典嗣先生のこと」

### 【翻刻】

村岡典嗣先生のこと

単に東北大学(旧東北帝国大学)に限らず、近代日本の学問史上ニオイテ、日本思想史学ノ創設者トイワレル村岡典嗣(ツネツグ)先生が他界サレテカラ、今年ノ四月デ満三十三年トナル。命日ハ4月13日デアル。戦後ノ疲弊ノ極致ニアツタ昭和21年1月ニ発病サレ、4月7日抗酸菌病院ニ入院、3月31日大学退官、旬日ナラズシテノ急逝デアツタ。

当時研究室デ助手ヲシテイタ私ハ出征中ニ家ヲ焼カレ、9月除隊後、今ハ市内トナツテイル名取川岸ノ富田ノ農家ノ物置ニ身ヲ置キ、弓ノ町<sup>4</sup>ニアツタ先生ノオ住居ニオ伺イシテイタノデアツタ。

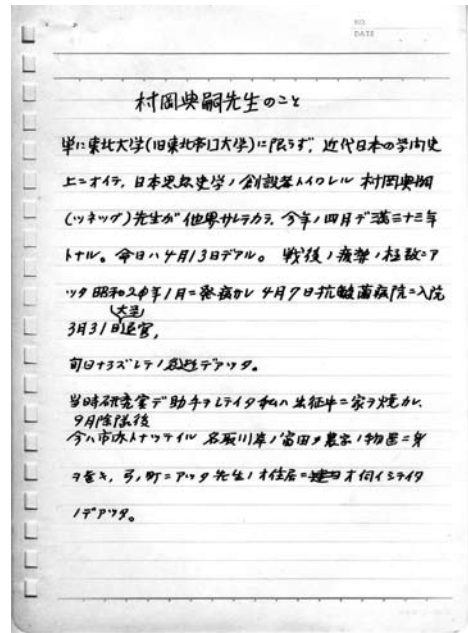
先生ノ病名ハ老人性TBトイウコトデアツタ。始メノウチハ風邪ダ位ニ思ワレテイタヨウデアルガ、ソノ発病ガ戦中ノ食糧難ニ由来スルモノデアツタコトハ疑イナイトコロデアリ、イワバ先生モ又戦争ノ貴イ犠牲者ノ一人トイウコトニナルデアル。元来医者ニ診ラレルコトヲ好マナカッタ先生ハ、年ノ始ニモ一見元気デ談笑サレ、4月以降ハ残ツタ講義ヲサレルト言ワレテイタ。シカシ1月末頃カラ次第ニ病状ハ思ワシクナクナリ、家庭デ病臥療養サレテイタガ、恢復ノキザシハナク、三月見舞ニ来ラレタ高橋里見先生<sup>(77)</sup>ノススメリヨリ、熊谷岱藏先生ノ来診ヲ仰イダトコロ、速刻入院スベキダトノ診断トナリ、否応ナシニ入院サレルコトトナツタワケデアル。

入院サレタアトハ安堵サレタノデアロウカ、我々ニモ、大分気分ガヨイ、コレデ大丈夫ダ、入院シテヨカッタナドト、サワヤカニ話サレタノデアツタ。

入院ノ翌日ダツタト思ウガ、私ハ院長ノ熊谷先生ヲ尋ネテ病状ヲ尋ネタ。意外ニモ熊谷先生ノ答エハ、極メテ危険ナ状態トイウコトデ、先ズ恢復ハ無理ダ、コレガ直ツタラ奇蹟ダロウトマデイワレタ。

サツキ先生ト元気ニ話シ合ツタ私ハ愕然トシテ目モクラム思イデアツタ。ソレカラ毎日病院ニオ尋ネシタガ、ハッキリオ話モサレルシ、コレガソノヨウナ危険ナ状態デアルトハ、ドウシテモ思エナカッタ。オソラク恢復サレルモノトばかり思ツテイタ。

4月12日デアル。竹田<sup>(77)</sup> (田野村)ノ観音ノ軸ガ家ニアルカラ、ソレヲ病室ニカケタイトイウ



ノデ持つて来ル様ニ命ジラレ、急イデソレヲ持つて来テ枕頭ノ壁ニカケタ。先生ハ喜バレタ様子デアツタ。

ソノ日ハ、明日又来マストイツテ帰ツタ。

思ヘバコレガ先生トノ最后ノオ別レデアツタ。

13日。名取川ノ家カラ例ノ通り西多賀駅マデ歩キ、秋保電鉄ニノリ長町ニ出、ソコカラ市電デ荒町マデ来、荒町ヲ歩イテ弓ノ町ノ家ニ出向イタ。9時頃ダツタト思フ。留守ノオバサンカラ、先生ガ急変サレタノデ、スグ来テ下サイトノコトデス、ト告ゲラレ、取ルモノモ取りアエズ抗酸菌病院ニ急イダ。タクシーナドトイウモノノナイ当時、唯一ノ交通ハ市電ダケデアツタ。コノ時ホド市電ノ速度ガモドカシク思ワレタコトハナカッタ。

病院ニカケツケ、病室ノドアヲ開ケタ。先生ノ顔ニカケタ白イ布ガ目ニ入ツタ。血ノ気ノ引ク思イデアツタ。奥様ガ、待ツテイマシタ、アナタノ名ヲ何度モ何度モ呼び続ケテイタノデス、トイツテ泣カレタ。

先生ニ対面シタ。コミ上ゲル思イニ号泣ヲ止メルコトガ出来ナカッタ。

今ニシテ思エバ、自分ノ両親ノ死顔ニ対面シタトキモ、コレホドニ取り乱シテ泣キハシナカッタ。

ソノ後何年経テモ、臨終ニ大声デ幾度モ名ヲ呼バレタコトヲ思ウト、イツモ目頭ガウルムヲ禁ジ得ナイ。

学問上ノ師弟関係ハ学問デコソ結ビツイテイルノデアルト思フ。シカシ更ニ深イ人間的ナ結ビツキガソコニアル。私ノ人生ニトツテ、コノ師トノ出合イハ何モノニモカエガタイ幸福デアツタコトヲ心ノ底カラ思フ。

### 【解説】

梅沢文書 I -19。本文中の「村岡典嗣先生が他界されてから、今年四月で満三十三年となる」という記述から、昭和54年（1979）の成立と考えられる。A5のルーズリーフの5枚の表側のみに万年筆（インクはブルーブラック）で手書きされ、筆跡から梅沢の自筆と認められる。冒頭に多少カタカナとひらがなの混在が見られるが、そのままとした。仮名遣いも原文のとおりである。句読点および改行については、一部筆者が添削し必ずしも原文のとおりではない。曾根原の注として（ママ）を付した箇所がある。

本資料によって明らかになる新事実として、以下がある。

- (1) 村岡逝去時の病名が結核であったこと<sup>6</sup>。従来（前掲「後記」など、以下同じ）、病名は明示されず、「栄養障害の為か」「心臓の衰弱が甚しく」など曖昧な記述であった。
- (2) 入院当初で、すでに死病であったこと。熊谷岱蔵院長の「極めて危険な状態」「先ず回復は無理だ、これが直ったら奇蹟だろう」という語調に反し、従来は「入院後一時小康を得たが」など、その時点での病気の深刻さが伝わらない記述であった。
- (3) 田能村竹田の観音像が病室にかけられた経緯。
- (4) 梅沢氏が臨終の場に間に合わなかったこと。

なお、前掲「後記」では、高橋里美法文学部長（当時）が見舞い、熊谷岱蔵院長の診察を勧めた時期を「四月はじめ」とするが、本資料では「三月」と記され、多少相違する点を指摘しておく。また、末尾に綴られた思いも、本資料以外ではおそらく見られないことと想像される。

本資料は従来にない事実を記しているが、梅沢氏が臨終の場に立ち会えなかったため、村岡の最期については伝わらない。その点で、次に紹介する一点はより臨場感のある資料といえる。

## 2. 梅沢筆記「村岡典嗣先生の臨終」

### 【翻刻】

(表紙)「村岡典嗣先生の臨終（きか夫人<sup>7</sup>談）」

村岡典嗣先生の臨終（きか夫人談）

十三日（四月）

朝四時頃眼覚めて「起きてゐるか」と私を呼びますので、これに答へますと、「一昨日は一寸寝苦しかったが、昨夜はよく眠れて大変気持ちがいい。のどがかはいたから、お茶を一杯くれないか」と申しますので、すぐ電熱器に薬罐をかけて湯をわかしはじめましたところ、湯のわく間、元気に色々の話をしはじめました。

「付き添いもよく世話をしてはくれるが、矢張り何かと身内の者の方がいいね。不思議な御縁であなたには大変お世話になった。」など冗談めいたことをいって笑ったりいたしました。

やがて「昨日梅澤君のかけて呉れた竹田の観音を見たいから眼鏡をとってくれ」と申しますから、眼鏡を渡しましたところ、これをかけましたが、壁にかかってゐる軸がどうも見えないらしい様子でございました。そこでその上に今一つの眼鏡を重ねてかけましたが、矢張り見えぬらしい様子で、結局それを見るのはやめてしまいました。

昨日観音の像をかけさせたといふ事に、何か一寸不吉な感じを覚へた私は、病人の視力のおとろへに驚いたのでございます。

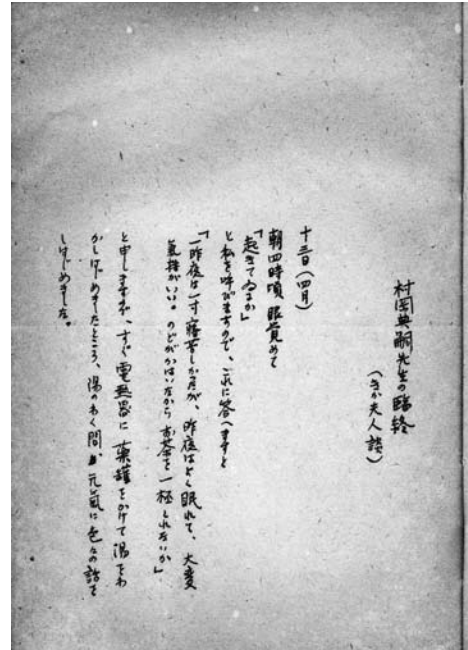
そのうちに湯がわいて来ましたので、早速湯呑にお茶をついで出しましたところ、いかにも美味しそうに音をたてて呑み、「お茶はおいしいものだ。この味のわからぬ人は不幸だね。お前も呑みなさい。」などいい乍ら、大きな湯呑に二杯半ほどもいたゞきました。

やがて「梅澤君はまだ来ないか」とききますので、「必ず見えるでせうが、今朝はまだ早いのですよ」と答へると、そのまゝ休みましたが、またしばらくして「梅沢君は来ないか」「梅沢はまだか」と五回ほど呼びました。

「梅沢さんに何か御用なのですか。御用なら伺っておいてお傳へしませう」と申しますと、「お前にはわからぬ。會って話さなければわからぬ」といって何にも語りませんでした。

そのうち「枕が低くて気持ちが悪い。直してくれ」と申しましたのでハッとしました。病人が「枕が低い」といふのは非常に危険な徴候であるときいてゐたからでございませう。

そこで枕を高くすると、気に入らぬらしく、「昨日はいつ子<sup>8</sup>が非常にうまく枕を直してくれた。あのやうに直してくれ」「どんなにしたのですか」「もっと高くした」といいますので、申



したやうにすると「これでいい」「ごはんの仕度をしてくれ」と申しながら、いつになく又いろ／＼おしゃべり致しますので、「あまり口をおくになつては疲れますから少しお休みになつたら」と申しますと、「それもそうだ。ではごはんの出来るまで静かに歌でも考へやう」。

そこで私が、そばを離れて食事の支度をして居りますと、それもしばしなほ色々な事を声高に語り出してゐましたが、言葉が不明瞭で内容ははっきりわかりませんでした。

しばらくして話声が静かになったので、変に思つて行ってみますと、何か眼の色が普通でないやうに見へました。先づ娘に知らせたと見え、すぐ稜威子が参、間もなく御医者がみえました。この時はまだ意識がたしかで、どの御医者様かときゝますので、いつ子の担当の先生と申しますと、いつ子が大変お世話になりありがたい御座いますと一寸頭をさへもたげて一禮いたしました。そこで急いで附添の方に医者を選んでいただきますと、医者は一応見て、「別に何でもありませんよ」といって、そのまゝ帰られました。

しかし矢張り、どうも様子が普通でないので、また医者呼びますと、今度は医者も重態に驚いて、「カンフル酸素吸入！」とさげんで手当をして下さいました。そのうち院長の熊谷先生も見えられましたので、今日一日位は持つかどうかとお尋ねいたしますと、「今日中は持つ」と申されましたので、早速各方面への電報の用意を始めました。

やがて医者たちは帰られ、看護婦だけが残り、酸素吸入をかけ乍ら病人の脈をとって居られました。

人名簿などをしらべてみた私は、何か吸入の音が変わったように思いましたので、顔をのぞき込んでみますと、すでに眼はひきつって居りました。「もうこときれたのではないでせうか」といいますと、看護婦も始めて驚いて、これを認めました。時間は九時十三分頃でした。枕頭に居りましたのは、私の外に稜威子と看護婦さんの三人でございました。殊に安らかな眠るやうな臨終でございました。子等の名も呼ばず、遺言めいた事も申さず、家庭の後事などなほさらいはず、ひたすらに梅沢様の御出をおまちしましたのは、日頃夢にもうつゝにも忘れ得なかつた研究上の事どもを申残したかつたのだらうと切に察せられました。

### 【解説】

梅沢文書IV -5。タテ25.0×ヨコ17.8cm。特に署名などなく、筆跡から梅沢の筆記と認定した。成立時期は未詳だが、おそらく村岡逝去後さほど時間を隔てず、夫人に聞き取りをした際の記録と思われる。したがって昭和21年の成立か。わら半紙半折の用紙を7枚重ね仮綴。万年筆書きで、鉛筆による後補あり。多少の推敲が見られるが省略し、最終的な表記を翻刻した。

本資料は殆ど従来（前掲梅沢メモを含む）に見られない記述を持つ。臨終の場に立ちあつた家族でなければ知りえない記述といえる。整理すると、次のような内容である。

- (1) 逝去の日の朝の様子。茶を2杯以上も味わうなど、死亡数時間前とは思えない様子が記されている。
- (2) 掛けられた竹田の観音像が見えなかつた程、視力が衰えていた様子。
- (3) 梅沢の来室を度々尋ねた様子。前掲梅沢メモにもその事実は記されていたが、「五回ほど呼」んだなど、より具体的に記されている。
- (4) 枕を高くさせたエピソード。
- (5) 最期の言葉が「静かに歌でも考えよう」であつたことは従来知られていたが、そこに

至る会話など。

- (6) 最初の急変の様子。「まだ意識がたしかで」あったこと。
- (7) 二度目の急変の様子。すでに意識が無いように読める。
- (8) 臨終の様子。正確な時刻や、立ち会ったのが妻と長女と看護師であったこと。

### 3. 小括

もし筆者の推測が正しければ、資料成立の順番は①「村岡典嗣先生の臨終（きか夫人談）」（昭和21年カ）→②『神道史』「後記」（昭和31年）→③「村岡典嗣先生のこと（梅沢メモ）」（昭和54年）となる。①が当初から梅沢の手元にあったと考えるなら、②の段階で曖昧だった死因が、③になって明確になったことはどう考えられるだろうか。専門家の御教示によれば、昭和21年時点でも入院段階で結核菌の検査はされているはずであり、病院側は結核であることを明確に認識していたと思われる。結核は進行の遅い、自覚しにくい病気であることから、本人や周囲の楽観、熊谷院長の悲観的な見方という対比も決して不自然ではないそうである。梅沢氏が、事態を客観視し納得するのに時間がかかったと見るべきかもしれない。

また②の記述のうち、「心臓の衰弱が甚しく…永眠された」の文章については、①にも③にも該当する記述が見当たらない。他に関連するメモ等が存在するのか、引き続き注意していきたい。専門家の御教示によれば、結核が原因となって体内各所に影響の現れるのは通例であり、心不全を起すことも珍しくはないそうである。

それから、②と③で多少相違する高橋里美法文学部長の見舞い等の時期については、②の勘違いに気づいたとして③を尊重すべきか、②の記述を忘れたと考え③を勘違いと見るべきか、現時点ではいずれとも決しがたい。新たな情報の入手を待って判断したい。

現在、結核治療薬として広く使われるイソニアジド（英 isoniazid、略称 INH）が一般化するののは昭和27年（1952）頃、結核の特効薬として知られる抗生物質のストレプトマイシン（英 streptomycin）はやや早く昭和23年（1948）前後に日本で用いられるようになったが、大変高価であったという<sup>9</sup>。いずれにしても数年の差で、村岡の運命は変わった可能性があった。改めてそれが惜しまれる。

#### 【謝辞】

村岡典嗣および関係者の事績については、典嗣教授の孫にあたる村岡洋一氏（早稲田大学教授）および池上隆史氏（藍野高等学校教諭）の御教示を賜りました。結核に関する記述については、渡辺彰氏（東北大学加齢医学研究所教授）に種々の御教示を賜りました（同研究所石岡千加史教授の御仲介による）。また、梅沢文書の整理に携わった佐藤正隆氏（東北大学大学院文学研究科博士課程在籍）には、筆跡に関する助言をいただきました。記して感謝申し上げます。なお本稿は、JSPS 科研費23242040の助成を受けたものです。

## 注

- 1 たとえば『季刊日本思想史』74号（2009年）の「特集 村岡典嗣－新資料の紹介と展望」など参照。
- 2 池上隆史「村岡典嗣年譜（一）」（『日本思想史研究』34、2002年）、同「同二」（同35、2003年）、同「同三」（同37、2005年）、同「同四」（同38、2006年）、同「村岡典嗣年譜－東北帝国大学文化史学第一講座着任から日本思想史学会成立まで（上）」（『年報日本思想史』2、2003年）、同「同（下）」（同3、2004年）など。
- 3 村岡典嗣著作集刊行会（代表者：石津照璽）編『神道史』（創文社、1956年）所収。引用にあたり旧字体は新字体に改めた。
- 4 仙台市弓ノ町42。村岡典嗣は宮城県内で一、二度転居しており、弓ノ町の自宅は生前最後の住居。
- 5 田能村竹田（1777-1835）は江戸時代の高名な文人画家。
- 6 「老人性TB」という記述による。「TB」とはTuberculosis（結核）の略。
- 7 村岡起家（1885-1968、旧姓柳下）。明治41年（1908）村岡と結婚し二女三男あり。
- 8 村岡稜威子（1910-?）。福尾猛市郎（1908-1990）と結婚。
- 9 渡辺教授の御教示による。結核に対する化学療法の進展については、『呼吸器学100年史』（社団法人日本呼吸器学会、2003年）p.99参照（島尾忠男執筆）。